

学会・シンポジウム報告

第41回国際応用動物行動学会議 (ISAE) 参加報告

河合 正人

帯広畜産大学 畜産科学科

2007年7月30日から8月3日までの5日間、メキシコ合衆国のユカタン半島先端の町メリダにあるHotel Fiesta Americanaにおいて、第41回国際応用行動学会議 (ISAE2007 Merida) が開催された。本会議への事前登録参加者は241人で、例年の300人程度、前年の英国 Bristol大会の381人に比べると少なかったが、今回は36カ国から参加があり、これは前年の1.3倍ほど多いものだったと聞いている。国別にみると、最も参加者の多かった米国が47人、次いで開催国のメキシコが40人、英国が26人、カナダが19人であり、日本からは私を含めて10人と5番目の参加者数であった。

今回のテーマは“Applying Ethology to Animal and Ecosystem Management”であったが、初日のWelcome Reception前に行われた基調講演は「昆虫の福祉」、家

畜の飼養や行動を研究テーマとしている私としてはまったくの別分野であるがゆえに、かえって内容としてはすごくおもしろいものであった。2日目からの発表演題としては、特別記念講演 (Wood-Gush Memorial Lecture) 1題、招待講演 (Plenary paper) 6題、ワークショップ4題、口頭発表94題 (写真1)、ポスター発表124題 (写真2) であった。

口頭発表は18のセクションに分かれており、それぞれのテーマ、トピックの演題数は、“Cognition, emotion and animal welfare” 7題、“Behavior and conservation” 3題、“Behavioral enrichment” 8題、“Pain” 4題、“Extensive systems” 6題、“Feather pecking” 4題、“Horse welfare” 2題、“Behavior and production related disease” 11題、“Sow locomotion” 3題、“Research in clinical ethology” 8題、“Stress and behavior” 4題、“Calf welfare” 4題、“Social behavior” 5題、“Ruminant welfare” 5題、“Poultry welfare” 4題、“Thermal environment and behavior” 4題、“Assessment methodology” 6題、“Free paper” 6題であった (プログラム順)。このように、動物福祉やそれに関連する演題が圧倒的に多く、英国・EUで誕生した動物愛護や福祉の概念が国際的にも広まり、家畜飼養や管理学の研究分野においてもますます重要視されている現状を反映していた。

私自身は北海道和種馬の林間放牧についてポスター発表したが (写真3)、今回、ウマに関する発表は欧州で開催されるISAEにおいてよりもやや少なく、またそのほとんどがやはりウマの福祉に関するものであ



写真1. 口頭発表の会場



写真2. ポスター発表の会場。参加者はラフな服装でアットホーム(?)な雰囲気国際学会である。

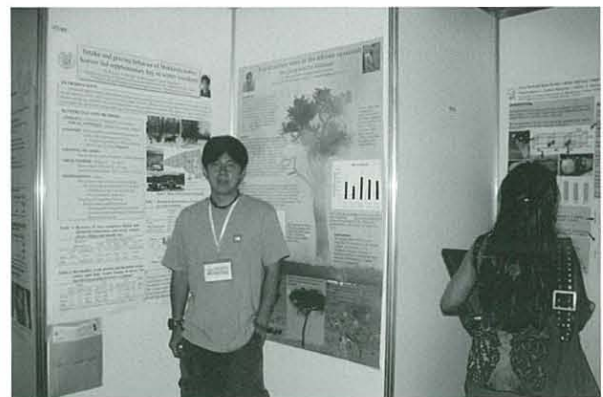


写真3. 私のポスターは森林でのウマ、隣はサバンナでのシマウマやトムソンガゼルの行動と、様々である。

た。一方で、“Extensive system”に関連する発表は、ウシ、ヤギ、ヒツジからウマ、ロバ、シマウマ、さらにはニワトリまで、様々な動物の放牧、放飼での行動と環境への影響、またこれに福祉の観点を入れた飼養管理評価など、多岐に渡っていた。粗放（というのは非常に抽象的な言葉で、どこまでが集約でどこからが粗放か難しいところではあるが・・・）な家畜の飼養管理は日本では比較的マイナーであると思うが、これらの研究発表を聞いて、また他国の研究者と情報交換や議論ができ、今後研究を進めていく上でとても参考になる部分が多かった。

会議の中日、3日目の午後はエクスカーションであった。開催国にもよるが、ISAEでは通常いくつかのコースのうち1つくらいは家畜をみに行けるコースが設定されている。しかし、今回の開催地メリダはマヤ文明の遺跡(写真4)と自然保護区に囲まれた街であったためか、残念ながら牧場や農場視察はなく、私の参加した野生フラミンゴの群生地(写真5)である自然保護区ポートクルージングの他、マヤ文明の遺跡めぐり、市内観光などであった。したがって、メキシコの家畜をほとんどみることはできず、目にしたのはエクスカーション終了後にディナーのため立ち寄ったレストランで飼っていたヤギ(写真6)と、街中で観光用

馬車を牽く比較的小格のウマ(写真7)、それに、後日個人的に遺跡めぐりをした際に乗ったバスの窓からちらりと見えた牛群(写真8)くらいだった。

最後に、この国際会議は毎年開催されており、発表演題数が200程度、参加人数が300人程度と、学会規模としてはそれほど大きいものではない。しかしその分、他国の研究者との交流や情報交換、議論を充分に行うことができる学会である。また、私のようなまだまだ若輩の研究者や大学院生の発表が多いというのがISAEの特徴であり、そうした若手研究者の発表に対しても、論文でよく名前を目にする各国の大御所行動学



写真4. マヤ文明を代表する遺跡ウシュマルの「魔法使いのピラミッド」



写真6. レストラン横の農場で肥育されていたヤギ



写真5. 野生フラミンゴの生息地として有名なメリダ郊外のセレストゥン自然保護区



写真7. 観光馬車はメリダの中心部、ソカロ周辺に多く、とくに夕方からは何十台も並ぶ。



写真8. 決して草が豊富とはいえない放牧地で草を食む牛群。おそらくゼブーを中心に様々な品種がかけ合わされた雑種牛。

研究者達が親切に質問し、丁寧にサジェスションもしてくれる。真夜中まで(から?) 延々と続くバンケットでの恒例ダンスタイムだけは、とくに日本人は苦手な傾向にあるが、それも含めて楽しく、有意義な学会参加となることは間違いないだろう。私自身、今後も

できる限り参加したいと考えているが、家畜行動学や管理学に興味のある学生諸君や若手研究者が、日本、北海道からもますます多く参加して欲しいと切に思う。